

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 座安浩史著『ウチナーヤマトウグチの研究』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 良子, Hayashi, Ryoko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000392">https://doi.org/10.57529/00000392</a>

紹介

座安浩史著

『ウチナーヤマトウグチの研究』

林 良子

本書は、二〇一六年に國學院大學大学院文学研究科に提出された著者による博士論文をもとに加筆修正を行ったものである。「ウチナーヤマトウグチ（沖繩大和口）」とは、伝統的な琉球方言と共通語の中間に位置する言語変種を称し、共通語に対する琉球方言の干渉によって生まれたものと考えられているが、その定義を含め、詳細な学術的研究はこれまで部分的にしかなされてこなかった。沖繩県豊見城市出身である著者が、日頃「共通語」であると思っていた言葉こそが「ウチナーヤマトウグチ」であり、多様性を持つ琉球方言圏においては地域共通語としての役割も果たしている。琉球方言には多くの変種がさらに見られ、口頭でお互いに通じ合うのが困難であるほど、島毎、集落毎の地域差が大きい。このような多様性により、ウチナーヤマトウグチにも大きな地方差が見られるのは当然であるが、それぞれの地域やその話者がどのように共通語と接触

してきたかによっても異なる。本書では、この点を考慮し、北琉球方言に属す豊見城市上田および、南琉球方言に属す八重山方言の一つである石垣島石垣市において、老年、中年、若年層への調査を行い、ウチナーヤマトウグチの多様性と全体像を掴むことを試みている。そのため、本書は、研究の位置付け・研究方法を述べる序章、今後の展望をまとめる終章の他に、1章で調査地点方言それぞれの音韻、2章で助詞を詳細に記述し、3章から7章は主たるテーマであるウチナーヤマトウグチの助詞をとりあげる構成となっている。3章では助詞「カラ」、4章で係助詞「は」「も」の前に付く「ガ」、5章で格助詞に後続する「ガ」、6章で終助詞の用法、と多岐にわたる言語データを示して分析を行っており、質量共に貴重な資料を提供している。特に、3章に示される「自転車カラ来た」などのように、共通語では「で」に対応する「カラ」では、明確な世代差が観察される。上田方言老年層では「カラ」と「で」が自由交替し、中年層では乗り物の種類により使い分けがなされ、若年層では移動手段としては用いられない。さらに、石垣市方言中年層では、「自分で運転する場合」には「で」、他者が運転するのであれば「カラ」という使い分けが見られる。また、共通語「を」に対応する「道カラ歩いてる」のような表現は、両方言中年

層において、自分から距離が近ければ「を」、遠ければ「カラ」と「物理的距離」が用法に影響を与えていることを明らかにしている。これは、伝統的な方言には見られない使い分けで、共通語を取り入れていく過程で生じたと著者は考えている。このような使い分けは若年層では形を変えており、親の世代である老年層の伝統的な方言を聞いて育ち、母語としてウチナーヤマトゥグチを持つ中年層（戦後〜本土復帰前生まれ）において、独自の用法が示されることは非常に興味深い。このような分析からは、二〇〇九年ユネスコにより危機に瀕する言語に指定された琉球方言の新方言であるウチナーヤマトゥグチが近い将来さらに大きく変容していく可能性を読み取ることができ、今後少しでも多くの言語データ収集が必要となるであろう。また、言語接触、言語変化という観点からも本書のような研究がますます重要となってくると考えられる。

最後に、本論文内容の一部は二〇一五年七月、『國學院雑誌』学生懸賞論文・佳作、および同年八月、サンパウロにて開催された「国際語としての日本語に関する国際シンポジウム (EJHB2015)」にて優秀発表賞を受賞し、出版にあたっては二〇一六年度國學院大學課程博士論文出版助成金の交付を受けたことを付け加えておく。

(A5判、三七二頁、森話社、二〇一七年三月刊行、定価八五〇〇円＋税)